親鸞の『観経』三心観

——「化身土巻」の問答を手がかりとして——

青 木 玲

はじめに

『観経』の三心とは、往生浄土に必須とされる「至誠心」「深心」「回向発願心」である。親鸞の『観経』三心観は、それを註釈した善導の『観経疏』三心釈に依るものである。親鸞はそれを、『教行信証』において「信巻」と「化身土巻」に引用し、それぞれの課題に応じながら、引文、訓点を位置付けている。「信巻」の引文は、親鸞の訓読から窺えるように「本願力回向の信心」（『定親全』一・一三八頁・原漢文）の内実を明らかにするものであるが、一方、「化身土巻」の引文は「自力各別の心」（同・二八八頁）の内実を明らかにしている。

このように、親鸞が「信巻」と「化身土巻」に展開する信心の課題は、従来表面的な他力の信と自力の信の分判と解釈されてきた。しかし、「化身土巻」の引文は単に真実信心に対する自力の信心を論じようとしているのではない。そこで親鸞が課題としているのは、自力に執っていく人間の根源的

な問題の見定めであると考ええる。

そこで注目したいのが、

問う。『大本』の三心と『観経』の三心と一異云何ぞや。（『定親全』一・二七六頁・原漢文）

という文言から始まる『大経』の「三心」と『観経』の「三心」の一異の問答である。この問答を通して、親鸞が『観経』三心に見出そうとする信心の課題を尋ねていきたい。

一、顕彰隠密

親鸞は、先の問いに続いて次のように答えている。

答う。釈家の意に依つて『無量寿仏観経』を按ずれば顕彰隠密の義有り。（同右）

ここで注意したいのは、問いが「三心」の一異であるにも拘わらず、それに対して「二」か「異」ではなく、『観経』を按ずれば「顕彰隠密の義有り」と答えていることである。その意義を今後の展開の中で考えていきたい。

『観經』の「顕彰隱密の義」について、親鸞は次のように述べている。

顕と言うは、即定散諸善を顕し、三輩三心を開く。然るに二善三福は報土の真因に非ず、諸機の三心自利各別にして利他の一心に非ず。如来の異の方便、忻慕浄土の善根なり。是れは此の經の意なり。即是顕の義也。彰と言うは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。（中略）斯れ乃ち此の經の隱彰の義也。

（同右・中略筆者）

まず、「顕」について「定散諸善を顕し、三輩三心を開く」と述べている。しかし、「自利各別の心」において行じざる善は、如来の願心に立つ限り「報土の真因に非ず」「利他の一心に非ず」とあるように、往生浄土の因ではない。如来の願心に立つて、なぜ『観經』にそのように説かれるのかと問い直す所に、「如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す」ための「如来の異の方便、忻慕浄土の善根」という意味が見出されるのである。

この領解は、「信卷」所引の善導の「三心」の位置付けにその根拠を見出すことができる。

何等為三より下必生彼国に至るまで已來は、正しく三心を弁定して以て正因とすることを明かす。即ち其れ二有り。一には、世尊機に随いて益を顕すこと、意密にして知り難し、仏自ら問いて自ら徴したまうに非ずは解を得るに由無きを明かす。二には、如来

還りて自ら前の三心の数を答えたまうことを明かす。

（同・二〇一—二二頁）

釈尊が「機に随いて益を顕すこと」は、衆生において「意密にして知り難」きことであり、仏の「自問自徴」なしに往生の正因は分からないと善導は解釈している。したがって、ここでは仏の「自問自徴」が非常に重要な意味を持つのであり、それによって往生の正因が「三心」として開かれてくるのである。ここに、釈尊が「機に随いて益を顕す」善巧摂化の具体相を見ることが出来る。この解釈から、親鸞は『観經』に「発三種心即便往生」（『真聖全』一・六十頁）と説かれることを、「如来の異の方便、忻慕浄土の善根」と述べるのである。

このように、親鸞は「三心」一異の問答において、『観經』の教説に如来の願心を根拠とする釈尊の善巧摂化が表れていることを明らかにしているのである。

二、広く浄土の要門を開く

では、なぜ『観經』はそのような形で説かれるのであろうか。そのことは、次の文から窺うことができる。

然るに娑婆の化主、其の請に因るが故に即ち広く浄土の要門を開く。安樂の能人の別意の弘願を顕彰す。其れ要門とは、即ち此の『観經』の定散二門是也。（中略）此の二行を回して、往生を求願せよと也。弘願と言うは『大經』の説の如しといえり。

『定親全』一・二七八頁・中略筆者

これは、釈尊が衆生の要請によって「広く浄土の要門を開く」、そして如来の願心を顕彰する、という文意を表すと了解できる。ここで注意したいのが、「安樂の能人の」^②と訓読されていることである。^③これによって、親鸞は、釈尊と阿弥陀のそれぞれの用きではなく、釈尊が「要門を開く」のは、如来の願心を根拠とすることを明示している。如来の願心を根拠とするから、「定散二門」が「浄土の要門」なのである。このように、釈尊は衆生の要請に応じて、如来の願心を顕彰する「浄土の要門」を「定散二門」という形で具現しているのである。次に注目したいのは、以下の文言である。

回向発願心と言うは、(中略)此の自他所修の善根を以て悉皆真実の深信の心の中に回向して彼の国に生れんと願す。

(同・二八二頁・中略筆者)

これは、「定散二善」を積んで浄土を求める「自利各別の心」の内実を表していると考えられる。なぜなら、「信巻」において「三心」は「定善の義を通摂す」(同・一二二頁)との確認があるからである。したがって、釈尊が「定散二善」を修して「往生を求願せよ」と勧めるのは、それなしに如来の願心は顕彰しないことを明らかにするためである。

そのように考えるとき、『観経』が「顕彰隱密」という形で説かれる意義が明らかになる。それは、「自利各別の心」に

おいてしか仏道を歩み得ない衆生に依じて釈尊が「定散二門」を開くのであり、その歩みなしに如来の願心は顕彰しないことを明らかにするためである。このように、親鸞が『観経』の経説に、教えを説く釈尊と、「自利各別の心」においてしか歩めない衆生を確認しているのである。

三、仮令の誓願良に由有る哉

「定散二善」を修して浄土を求める法門は「久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る」(同・三〇九頁)とあるように、「出離」する課題がある。しかし、これに對して第十九願が立てられた所に、親鸞は「既にして悲願有ます」^④(同・二六九頁)事実を領解したのである。この悲願は、「眞実方便の願を超発す」(同・二八七頁)とあるように、「眞実に依る方便の願」(『金光大榮著作集』第八卷・二〇二頁)であるから、「諸有の群生を招喚したもうの勅命」(『定親全』一・二二七頁)の如来の大悲心を具体的に表すものである。

したがって、このような大悲の願心に目覚めれば、然るに常没の凡愚、定心修し難し、息慮凝心の故に。散心行じ難し、魔惡修善の故に。

(同・二八九頁)

とあるように、「定散二善」を修していく中に、歩めない自己を招喚してやまない如来の願心、すなわち欲生心に出遇っていくのである。このことを通して、

仮令の誓願良に由有る哉。仮門の教、忻慕の積、是れいよいよ明らか也。二經の三心、頭の義とに依れば異也。彰の義に依れば一也。

三心一異の義、答え竟りぬと。

（同・二九二頁）

とあるように、「仮令の誓願」の意義が明確になる。それは、衆生が「定散二善」を修して浄土を求めていく歩みの根拠が如来の欲生心ということである。このように、欲生心を根拠とするから釈尊の説く「定散二門」が「浄土の要門」なのである。

そのように考えるとき、衆生の信樂獲得の因縁としての如来の願心と釈尊の善巧摂化の關係が見えてくる。それは、如来の願心を根拠とし釈尊が「定散二善」を衆生に開示する。衆生は、その教えに随い歩むことで如来の願心に出遇っていく。換言すれば、衆生の歩みの根拠が如来の欲生心である。欲生心は、釈尊の善巧摂化の根拠でもあり、衆生の歩みの根拠でもある。この確認によって、二經の「三心」一異が結論付けられる。「頭の義に依れば異也」とは、『観経』に顕れている「三心」は釈尊、善巧摂化を表し、「彰の義に依れば一也」とは、二經「三心」共に如来の願心を表すものである。

おわりに

このように、親鸞は「三心」一異の問答で、二經の「三心」を単純に比較しているのではない。ここで親鸞が確認してい

るのは、教えを説く釈尊と、「自利各別の心」においてしか仏道を歩めない衆生である。

釈尊が「定散二善」を修して浄土を求めよと勧める歩みは、如来の願心に照らせば廃捨すべきものであるが、これに対して第十九願が建立された所に、親鸞は悲願の具体性を領解したのである。すなわち、「自利各別の心」において浄土を求めていく歩みの根拠が、如来の欲生心なのである。以上のことから、親鸞は『観経』三心に、如来の願心に衆生を誘引する歩みを勧める釈尊の善巧摂化と、如来の願心の意味を見出しているのである。

1 例えば、香月院深励の説（『教行信証講義集成』第五卷・三

一〇頁）などを参照。

2 傍線筆者

3 親鸞加 points の『観経疏』では「の」（『定親全』四・六頁）の訓点はなく、阿弥陀が願心を顕彰すると解釈している。

（キーワード）親鸞、『観経』三心、化身土巻、顕彰隠密

（大谷大学大学院）

tion of the three minds of the Original Vow, which caused Shinran to write his questions and answers regarding the three minds of the Original Vow and Vasubandhu's single mind in the "Chapter on Faith."

134. Shinran's View of the Three Minds in the *Contemplation Sūtra*: With a consideration of his Questions and Answers in *Keshindo no maki*

AOKI Rei

In this paper, through a consideration of Shinran's questions and answers regarding the difference and the singularity of the three minds of the *Larger Sūtra* and the three minds of the *Contemplation Sūtra* in *Keshindo no maki* of his *Kyōgyōshinshō*, I will attempt to clarify the problem of faith that he discovered in the three minds of the *Contemplation Sūtra*.

135. The *Hōonki* and Repaying Indebtedness: On the story of correspondence between Shōtoku-Taishi and Zenkōji-Nyorai

TATUSGUCHI Kyōko

Zonkaku (1290-1373) was a great-great-grandchild of Shinran, the founder of the Jōdoshin sect. He traveled throughout Japan, and wrote many books to spread Shinran's doctrine. The *Hōonki* is one of Zonkaku's works.

In my previous paper I analyzed the motive of his book. He insisted in it that filial piety in Buddhism is better than filial piety in Confucianism. This is because in Confucianism filial piety causes happiness in this life, but in Buddhism filial piety causes happiness in this life and the life to come. And *Nembutsu* is the best form of filial piety.

In this paper I will analyze the tale "The correspondence between Shōtoku-Taishi and Zenkōji-Nyorai." This tale was well-known in medieval times. Amida-hijiri holymen spread the story to many areas.

Zonkaku used this tale as an example of memorial services for transferring merit. He insisted that we should perform such memorial services to repay indebtedness.

However, his thought was not the same as Shinran's. For Zonkaku, merit-transference memorial services were a means to an end to spread Shinran's doctrine.